

いつまでも精力絶倫の夫になんて、なれっこねえ!

小学生の時に一番嫌だった農作業の一つに水路の掃除と両サイドの草刈りがある。

今でもこの仕事は正直やる気が起これない。なぜならコメを作っていないので「なんでこんなことやらないの?」と思う。思うきやいけないの?」とは思う。思うのではあるが、地目は水田であり昨年からは始まった「農地・水・環境保全向上対策」もあって、一応積極的に参加するふりはしている。今でもそうだが、私が学生だった時も用水掃除や草刈りの連絡は、地区のボスから親へ、そして自分に命令がかかって、イヤイヤやっていた。

特に夏休みころの草刈りは暑く、北海道でもたった2時間でもヘトヘトになってしまう。

その後、部活に行くのだから、この年齢を考えると当時の疲労回復力は、モンサントの子会社ファイザー製**バイアグラ**並みだ。

中学生になった昭和45年(1970年)ごろから、私は農業の手伝いをするようになったが、草刈りの非近代的、非効率性には疑問を感じずにはいられなかった。

まず、なぜ日曜日にやらなければならぬのか?

学生にとって、日曜日はサラリーマンと同じく朝遅くまで寝ていられる貴重な時間のはずだ。もちろん頭数をそろえるために日曜日は都合の良いことはわかるが、何かほかの方法があるはずと考えていた。

そういえば、参加人数は耕地面積5haあたりにつき1人を出さなければいけなかったと思う。ということは、当時の我が家でも5、6人を用意しなければならなかった。どう考えても家族では対応できないのでアルバイトを雇うことになる、そこでまた一言、「あいつはアルバイトを雇っている」と言われる。今では高校生や人材派遣を利用して急務をしのご当然の行為が、当時では自分では管理できない者としての評価をいただくことになった。

我が家の農地は1カ所に固まっていなかったため、作業は各々の用水支線ごとに2週に渡って行なわれていたが、面積が30haを過ぎたあたりから単なる頭数の問題ではなくなってきた。当時は草刈りと言えば手鎌

Vol.6 草刈りと経営感覚



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約8000万円。

Illustration by Kazushige Akita

を使い、30分作業後、一服して刃を研ぎチンタラやっていたものだ。

しかし、それぞれ規模拡大が進むにつれて、段々とエンジンの刈払機が登場して作業時間の短縮を目指し、営農に集中するようになった。

中学生であった私もエンジン刈払機を使う様になり、自分の時間が増えて2時間の仕事が1時間で終了するようになって

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

た。

ただその時でも**長老たち**（当時40歳くらい）から、私は「バカなやつだ！」と言われたものだ。「金にもならない共同作業にガソリン代金や金をかけて刈払機を買うなんて」と言っていたことを覚えていて。中学生で当時から無口で無垢な私（？）は部活や勉強に集中したかっただけで長老たちに言い返すことはできなかった。

1980年頃になると、2台の刈払機だけでは対応できなくなり、3台目も考えたが、それを使う人間がいなかった。そこで決められた日の数日前から初めて、開始当日には作業を終了するようにした。

そこでまたもクレーム発生。長老いわく、「共同作業なのだからみんなと同じ機械、同じ日に作業をしなければならぬ！」。

はっ？ さすがにそれはおかしいでしょう。

草刈りをするのがメインの作業であって、見たくもない面をつき合わせるのが仕事ではない！と食ってかかり、その後も無視してきた。

現在では各々の面積が増え、私がつやっているように、決められた日の作業が終了すればOKになったのは当然の流れであろう。しかし、昨年から農地・水・環境保全向上対策

では、作業の証拠として写真添付が義務付けられ、作業当日にその場所にいなければ、お金がいたただけなくなった。

面積が少なく、週末農家には都合が良いかもしれないが、雇用をしている環境では、やはり日曜日は避けていたいただきたいのが本音だ。

わが息子(本物の方)よ、

キミもまた？

さて、時は平成に入ると、農地面積が40haくらいになり、作業の時間差攻撃や刈払機だけでは対応するのが難しくなってきた。つまり面積拡大に伴い、作業効率が落ちたのだ。そこで除草剤の登場。1年目は毒性が高いブリグロックスなどを使ったが、安全性に関しては塩やしょう油よりも急性毒性が低いモンサント製ラウンドアップをすぐに使うようになった。このラウンドアップが登場した昭和53年ごろは5000円（500cc）だった。平成になった時点でも2500円（500cc）の高い農薬だった。

この農薬を、金にもならない用水の通路に散布するだけで20万円以上の経費が必要だったが、年に1度散布するだけで十分効果はあったし、一番のメリットは、作業スピードが3倍から5倍になったことだ。

それを見ていた長老たち（繰り返すが、やはり40歳くらいだ！）は、「金にもならない仕事に、なんでそんなに高い経費を使うんだ？」と言った。「ん、どこかで聞いたセリフだな？」と思い出すと、20年前にも同じことを言われた記憶がよみがえってきた。よくよく思い出すと、20年前に発言した親の息子が言っているのではないか！

今では公園に使われている抗菌砂はきれいで、雑草の発生を抑えてくれる。農業経営者の広告ページを見ると、除草シートなるものが販売されていますね。もちろん除草剤よりは面積あたりのコストは高いと思いますが、近い将来使用することを考えていかないといけないでしょう。

そういえば、実は平成の長老にも息子がいます。きっと私の息子も、平成の長老の息子が40歳になった時に言われるんでしょうね。

「なんでこんな儲からないことにコストをかけるんだ？」って。

早い話、カエル子のカエル子、

トンビからタカは生まれません。もつとはつきり言えば、出来の良い親からは1対3で、出来の悪いのと出来の良いのが生まれ、バカからは100%バカしか生まれません。

誤解しないでください。私が言っているんじゃないりません。皆さん

が中学校で習った、メンデルがそのように言っているんです。ということは私の息子はもしかして……。

どうして農業の現場では学校の学力と何ら関連性がない行動パターンが取れるのか？ 学校でいくらか成績が良くても農業の現場では？ マークが付くと言うことです。

正直そのような学力優秀な方たちは都市に吸収された方が、評価が高いのではないかと思う。

現在、用水等で使用している中国製グリホサート剤（非農耕地用）は200円（500cc）と、とてもリーズナブルな価格になり、ほとんどの農家が使用できる環境になったことはうれしいが、将来ラウンドアップ耐性の大豆やコーンが日本国内で栽培された時に、知的所有権の観点からも純正の商品もしくは許可されたグリホサート剤を使用しなければならぬと考える。

中国、韓国のコピー商品の報道を見聞きすると「なんて知的所有権の知識のない連中なんだ」と思う方がいると思いますが、アメリカ人からみると、まだまだ日本もアジアの友の一部にしか評価されないのである。この**厳然たる事実を認識すべきで、**自分の子供たちに何を教えるべきかで優先順位が決まるのは、当然のことだ。